

# 思索の旅

モンゴル

写真・中嶋嶺雄



スターリン像は健在だった (モンゴル科学アカデミー前で)





車窓から見た中国との国境地帯は一見のどかであった



珍しいラマ教寺院の内部風景（ガンダンテチンリン廟で）

# 歴史と文明の緩衝地帯

中嶋嶺雄

樹氷が朝の太陽に輝くバイカル湖岸からモンゴル人民共和国の首都ウランバートルまでの冬景色は、白一色から淡藍色へ、そして茶褐色へと変わっていった。ウランバートルも晴天つづきであったが、高原盆地の内陸都市だけに、寒さはシベリア以上に厳しい。モンゴル滞在をおえて、ゴビの砂漠を越え、内蒙古を経由しての三日間の汽車旅で北京へたどりついたとき、北京の冬もかなりの寒さであるはずなのに、私にはそこが春であるかのように感じられた。

ユーラシア大陸のどまんなかに位置するモンゴルが昨秋、革命五〇周年を迎えた社会主義の独立国家だといっても、多くの人びとはいぶかしげな顔をする。それほどまでにモンゴルは、ソ連と一緒くたに考えられているのだろうか。

跡を残した三民族が、それぞれに異なった肌合いの社会主義国家を形成してユーラシア大陸を縦貫していることもつ歴史と文明のダイナミックスを実感するとともに、かつてはロシア民族と漢民族を制圧したモンゴル民族が、今日では中ソ両大國のはざまに生きる“小國”としてあるという現実と接し

今日でもモンゴル人の民族としての居住空間は、北はソ連領ブリヤート自治社会主義共和国から南は中国領内蒙自治区まで、東は中国東北の黒龍江省(旧ホロンバイル地方)から西は新疆ウイグル自治区さらには中央アジアにいたるまで、ほぼインド亜大陸全土にも匹敵する広がりをもっている。このように広大な居住空間を、遊牧騎馬民族であるモンゴル人はかつて自由闊達に移動し得たのだが、今日では、いわゆる外蒙の地が独立国家を形成しているにすぎず、近世以降は主としてスラブ民族と漢民族の歴史と文明の緩衝地帯でもあったこの広大な居住空間

も、ちりちりに分断されてしまった。

しかも、中ソ対立の激化にともなって、今日、大量のソ連軍がモンゴルに進駐しており、中蒙国境一帯にはソ連の軍事基地が散在している。それ以外には、中国との国境駅サインシャンデまで一日半の車窓は、連綿と単調につづく草原と砂漠、しばしば視界に入る羊や牛の放牧、点在するラクダといった風景だが、砂漠のまったなかで標石のほかにこれといった境界線もない国境には、自動小銃を背にした二人のモンゴル兵が警戒に当たっていた。

かつては馬賊や大陸浪人の跳梁した世界でもあるモンゴルの地は、“草原と包”“夕日と拳銃”の世界として、しばしば日本人のロマンチズムをかきたてる対象であったが、中ソ対立下のモンゴルの現状は、イデオロギー面でも生活面でもきわめて厳しいものであるようだ。

第二次大戦後、この地に抑留された日本人のうち三千人もがこの地に果てたが、ウランバートルの主要建造物は、これら抑留日本人の建てたものだという。科学アカデミーの建物もその一つだが、そこには巨大なスターリン

の銅像が聳えていた。

モンゴル革命の英雄スフバートルと並ぶべき革命家の一人で、モンゴル科学アカデミーの源流を創出した学究、ブリヤート・モンゴル人のジャムツァラーノは、その豊かな感受性とモンゴル民族としての誇りのゆえにスターリン主義の時代の犠牲者となって散り、今日でも民族主義者のレットテルをはられたままである。この地のスターリン像が撤去される日はたして来るのだろうか。

モンゴルは、チベットから入ったラマ教の世界でもあったが、現代モンゴルはラマ教の活仏が君臨した聖俗封建制の世界ではない。だが、有名なラマ廟ガンドタンテチンリン(慶寧寺)はいまもウランバートルに残っていて、日曜日にはそこを訪れると、中年の女性が独特の礼拝用鉄板に身を伏しては立って懺かれたように拝んでいた。堂内ではラマ僧たちがチベット語の経典をひらげて日暮らし読経をつづけている。そこに広がる無限の世界には、革命も反革命も、社会主義も中ソ対立も、まったく介在する余地がないように思われた。

(なかじま かねお、東京外国語大学助教授)

# 思索の旅

